

岡山市内の病院で働く看護職の学士取得に関するニーズ調査

安酸 史子・有岡 明美*・田中 智子**・和田 幸子***

要旨 岡山市内500床以上の病院に勤務する看護職500名を対象に、学士取得に関するニーズの実態調査を行った。今回は‘学士取得の意志あり’という積極的ニーズに‘条件が合えば可能’という潜在的ニーズを加えたものを学士取得ニーズと定義した。回収率は93.8% (469名)で、そのうち学士取得意志有りは90名 (19.2%)であり、‘条件が合えば可能’は114名 (24.3%)であった。この結果、岡山市内の病院で働く看護職の学士取得ニーズは43.5%と高いことがわかった。また学士取得のニーズは30歳代では55.8%と最も高く、病棟において主任等管理的役割を取り始める年齢であることから、キャリア発達との関連で学士取得ニーズが高くなる可能性が示唆された。

学士取得の受講動機に関しては、筆者らの先行研究の結果をもとに、①自己成長欲求②仕事関連のニーズ③大学志向④内的・外的条件の4つのカテゴリーを枠組みにして構成した質問紙を用いて調査した。調査の結果、自己成長欲求や仕事関連のニーズが高いことが明らかになった。一方、学士取得のための条件としては厳しい現実があることがわかった。今後、学士取得ニーズを現実化するためには、専修学校卒業生の編入制度の導入や職場の条件整備に関する検討が必要である。

キーワード：継続教育 看護職 学士取得ニーズ キャリア発達 編入学制度

はじめに

現在、医療技術の高度化や価値観の多様化に伴い看護婦の質的向上が求められ、こうした社会の要請に対応できるよう、看護教育の大学化が進んでいる。岡山県下でも平成11年には看護系大学が4校となる。全国では平成10年には看護系大学が65校となり、入学定員は4253名であるが、このうち第3年次編入定員はわずか512名である(大室, 1998)。しかもこれらは現在のところ全て看護短大からの編入である。アメリカでは、看護婦の多様な経験やニーズに対応した学士取得コースやプログラムに関する検討が様々に報告されている(Messmer, P.R. et al, 1995, Hegge, M., 1995, MacLean, T.B. et al, 1985)。我が国においては本年の通常国会で学校教育法が改正され、専修学校の卒業生の大学編入の道がようやく開かれることになった段階であり、看護婦の学士取得のためのコースやプログラム開発に関しては、これから具体的な検討に入る状況と言える。そうした歴

史的状況の中で、筆者らは4年前より専門学校卒業生の看護職の学士取得に関する研究を行ってきた(有岡ら, 1995, 田中ら, 1996, 和田ら, 1998a, 和田ら, 1998b)。

先行研究(有岡ら, 1995, 田中ら, 1996)では、働きながら通信教育で学士を取得した、あるいは取得中の看護婦19名を対象とし、受講動機及びその体験について半構成的インタビューを行い、内容分析の手法を用いて分析した。現在、看護専門学校卒業生の看護大学への編入制度がないこともあり、この19名はすべて看護学士以外の学士であった。内容分析の結果、受講動機として「自己成長欲求」「仕事関連のニーズ」「大学志向」「内的・外的条件」の4カテゴリーが抽出された。さらに事例ごとにカテゴリーの関連について検討した結果、「自己成長欲求」「仕事関連ニーズ」「大学志向」という3つの学習欲求に「内的・外的条件」が加わることにより受講動機となり、学士取得行動につながるのではないかと考え、学士取得の動機の関連モデルを作成した(図1)。

岡山県立大学保健福祉学部看護学科
〒719-1197 岡山県総社市窪木111

* 聖華看護専門学校

〒700-0031 岡山市富町2丁目13-14

** 岡山中央病院健康増進部

〒700-0026 岡山市奉還町2丁目18-19

*** 岡山協立病院 ICU

〒703-8511 岡山市赤坂本町8-10

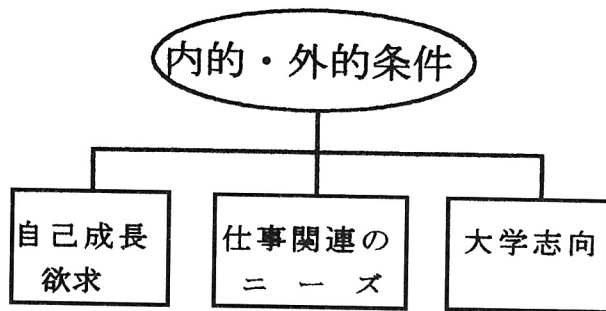


図1. 学士取得の動機の関連モデル

また、受講体験は、動機は様々であっても多くの促進・阻害因子の影響を受けながら自己実現へと向かう成長のプロセスであり、次の目標を見だし生涯学習へつながっていくことを報告した。(有岡ら, 1995, 田中ら, 1996)

先行研究では質的研究手法により学士を取得もしくは取得中の受講動機及び受講体験を明らかにしたが、今回は先行研究の結果をもとに質問紙を作成し、学士取得のニーズとそれに関わる要因について、岡山市内の病院で働く看護職の実態調査を実施した。

I 研究目的

岡山市内で働く看護職の学士取得ニーズの実態とそれに関わる要因について検討する。

II 研究方法

1. 調査対象

岡山市内500床以上の総合病院5病院に勤務する看護職500名。

2. 調査期間

1997年8月28日～9月30日

3. 調査内容

質問紙は以下の質問で作成した。

1) 学士取得の動機の関連モデル(図1)を概念枠組みとした61項目の質問内容。質問項目は先行研究におけるインタビュー内容をもとに作成した。出来るだけ多面的に受講動機を把握したいと考え、類似した質問項目であってもニュアンスの違いがあると判断し、質問項目の精選は行わなかった。61項目の内訳は自己成長欲求12項目、仕事関連のニーズ15項目、大学志向20項目、内的・外的条件14項目である。

各質問項目に対し「そういう思いがある」「少しある」「あまりない」「全くない」の4段階で回答し

てもらい、それぞれに「3」「2」「1」「0」の得点を付けた。

2) 対象者の背景に関する17項目の質問内容。職種、教育課程、最終学歴、職位、勤務年数、雇用形態、勤務形態、勤務場所、実習生の受け入れ状況、実習指導の経験、性別、年齢、婚姻状況、家族状況、年収、学士取得の意志の有無、取得したい学士の種類とした。

3) 自由記載2項目の質問内容。

看護婦が学士を取得することについてと、看護婦の生涯教育について自由記載を求めた。

4. 調査方法

研究対象機関の看護部長に研究の同意を得た後、研究依頼書とアンケートを発送した。対象者への配布は所属長に依頼した。回収は、留め置き法と郵送法で行った。

5. 分析方法

統計パッケージHALBAUを用い、クロス集計による χ^2 検定を行った($P < 0.05$)。さらに年齢別平均値は一元配置分散分析を行った。

6. 質問紙の妥当性と信頼性

質問項目については、先行研究で抽出した受講動機に関するコードを用い、共同研究者間で話し合いその内容妥当性を検討した。

クロンバックの α 係数は、条件項目が 0.75 、大学志向項目が 0.89 、仕事関連のニーズ項目が 0.71 、自己成長欲求項目が 0.74 であった。

III 結果

回収率は93.8%(469人)であった。

1. 学士取得意志の有無

学士取得意志ありは90名(19.2%)であった。すでに学士を取得したあるいは取得中の看護職に対する著者らのインタビュー結果で、種々の条件が学士取得行動に大きく影響していると考えられたため、潜在的ニーズを把握する目的で、「条件が合えば可能か」という質問を付加したところ、さらに24.3%(114名)のものが可能と回答した。

今回は、積極的ニーズと考える「学士取得意志あり」と潜在的ニーズと考える「条件が合えば可能」を学士取得ニーズと操作的に定義した。その結果、岡山市内の病院で働く看護職の学士取得ニーズは43.5%(204名)であった(図2)。

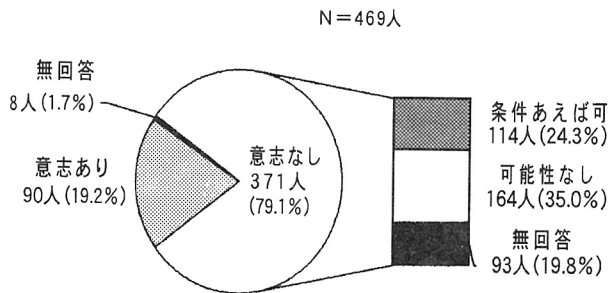


図2. 学士取得意志の有無

2. 対象者の背景と学士取得意志の有無

学士取得意志の有無を対象者背景とをクロス集計した結果、年齢・職種・教育課程において有意差がみられ、年収・婚姻状況・家族状況・勤務場所・勤務形態などには差がみられなかった。

職種の内訳は、看護婦(士) 453名 (96.6%)、助産婦16名 (3.4%) で、そのうち学士取得の意志ありと回答しているものは、看護婦が17.7%、助産婦が62.5%で、助産婦が高かった。(図3)

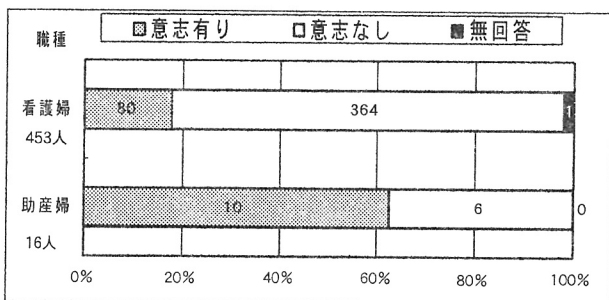


図3. 学士取得意志の有無と職種

年齢構成は、年齢を記入していない2名をのぞく467名で集計した。その結果、20歳代273名 (58.5%)、30歳代106名 (22.7%)、40歳代71名 (15.2%)、50歳代17名 (3.6%) であった。そのうち学士取得の意志ありと回答しているものは、30歳代が27.4%と最も高く、条件があえば可能を加えると55.8%と過半数を越えていた。(図4)

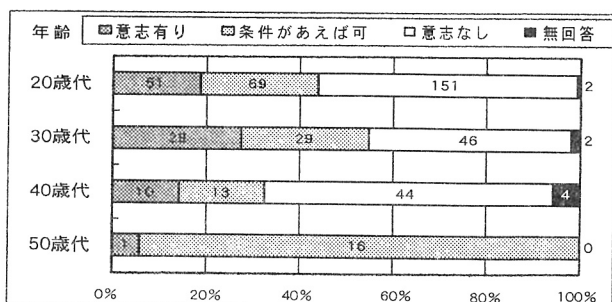


図4. 学士取得意志の有無と年齢

教育課程は、未記入1名とその他3名をのぞく465名で集計した。内訳は専門学校卒412名 (88.6%)、短大卒53名 (11.4%) であった。そのうち学士取得の意志ありと回答しているものは専門学校卒が16.7%、短大卒が37.7%で短大卒が有意に高かった。(図5)

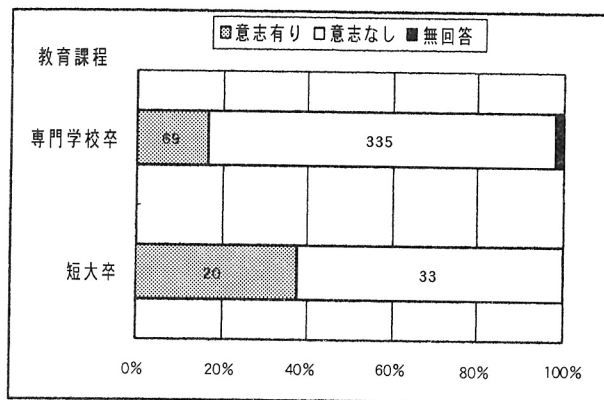


図5. 学士取得意志の有無と教育課程

3. 学士取得の動機カテゴリー項目と年齢との関連
1) 自己成長欲求

表1に自己成長欲求の各質問項目の年代別の得点結果を示した。「自分の視野を広げたい」は平均値 2.80 ± 0.47 と高く、「看護以外の人と関わってみたい」は 2.67 ± 0.59 、「一般教養を高めたい」は 2.54 ± 0.66 、「もっと他の世界を知りたい」は 2.53 ± 0.67 など、勉強することによって自己成長したいという欲求は高い。しかし、「勉強は好きな方だと思う」 1.20 ± 0.81 、「他にすることがないので勉強しようと思う」 0.97 ± 0.81 、「勉強していないと遊んでいるような気がする」 0.93 ± 0.86 など、勉強すること自体に関しての欲求は高くないことがわかった。

年齢間で有意差のあったものは、「変化のない生活から抜け出したい」が20歳代に高く、「一般教養を高めたい」「最近人に指摘されることがないのでこれでいいのかとを感じる」などは30歳代以降で有意に高くなっていた。

2) 仕事関連のニーズ

表2に「仕事関連ニーズ」の各質問項目の年代別の得点結果を示した。

「看護研究の時に困ったことがある」は、平均値 2.75 ± 0.58 、「臨床指導者は専門的な知識が必要と思う」は 2.75 ± 0.5 と年代を問わずに非常に高い値を示した。「臨床指導者は大学での教育が必要だと

思う」「学生指導に苦勞している」「スタッフの指導に苦勞している」「スタッフを指導する上で大学教育の必要性を感じる」などの項目は30歳代以降で有意に高くなっていった。「看護教育に携わりたい」は 0.98 ± 0.80 と低かった。このことから、将来の仕事のためというよりも現在の仕事を充実するためのニーズとして、学士取得ニーズが高いことが示唆される。

3) 大学志向

表3に「大学志向」の各質問項目の年代別の得点結果を示した。

「これからの看護教育は大学であるべきと思う」の平均値は 2.29 ± 0.8 、「看護教員は大学での教育が必要と思う」は 2.27 ± 0.82 、「看護学校の教育が学歴にならないのは不公平だと思う」は 2.14 ± 0.92 と大学での教育の必要性や現在の看護教育制度に対する不満などは年齢が上がるにつれて高くなっており、特に50歳代では有意に高くなっていった。

また「大卒の方が給料がよいと思う」は 2.30 ± 0.88 と高く、実際に「大学に行きたいと思ったことがある」 1.97 ± 1.07 、「大学に進学している人を羨ましいと思ったことがある」 1.96 ± 1.02 なども比較的高くなっていった。しかし、「大卒の人に引け目を感じたことがある」 1.00 ± 0.95 、「大卒の人の方が優れていると思う」 0.92 ± 0.96 などの項目は低く、「学歴コンプレックスはあると思う」が 1.38 ± 1.01 とそう高くない値であることから、今回の調査結果からは専門学校卒の看護職は大卒の看護婦に対し、特別な学歴コンプレックスを感じていない可能性が示唆された。

また「働きながら大学に行きたいと思う」 0.92 ± 0.96 、「仕事をやめて大学に行きたいと思う」 0.74 ± 0.84 は共に低い結果を示した。さらに「自分には学士を取得できる力がある」が 0.78 ± 0.83 と低いことから、学士取得のニーズはあっても実際に学士を取得していく自信が低いために具体的な行動化につながりにくい可能性が示唆された。

年齢別では、「看護系大学で社会人入学制度があれば受験したいと思う」「働きながら大学に行きたいと思う」という現実的な受講意志は30歳代で有意に高いことが明らかになった。

4) 内的・外的条件

表4に「内的・外的条件」の各質問項目の年代別の得点結果を示した。

「長期の休みが取れないと思う」の平均値は 2.54 ± 0.81 「仕事がついと感じる」は 2.51 ± 0.68 、「時間的ゆとりがない」は 2.05 ± 0.98 と高く、働きながら学士を取得するためには、仕事との両立の厳しい現実が明らかになった。また「大学に関する情報は少ないと思う」が 2.16 ± 0.74 と高く、予想以上に情報不足を感じている実態がわかった。さらに、年齢が高くなるにつれて「仕事と家庭で精一杯である」「大学に行くには職場の理解が得られないと思う」「学士を取得するには年齢的に無理と思う」など、さらに条件は厳しくなっていることが明らかになった。

表1. 自己成長カテゴリーの年齢別平均値

質問項目	平均値	S D	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	有意差
1 自分の視野を広げたい	2.80	0.47	2.77	2.86	2.84	2.70	
2 看護以外の人と関わってみたい	2.65	0.59	2.66	2.70	2.58	2.47	
3 一般教養を高めたい	2.54	0.66	2.43	2.67	2.70	2.70	**
4 もっと他の世界が知りたい	2.53	0.67	2.56	2.55	2.43	2.17	
5 井の中の蛙状態だと感じる	2.10	0.94	1.97	2.34	2.21	2.29	*
6 このままでいいのかという焦りがある	2.02	0.88	2.01	2.08	2.00	1.81	
7 経験だけを重ねているようで焦る	1.71	0.89	1.66	1.92	1.68	1.43	*
8 変化のない生活から抜け出したい	1.65	1.00	1.87	1.52	1.11	1.00	**
9 最近人から指摘されることがないのでこれでいいのかと感じる	1.55	0.96	1.38	1.78	1.80	1.70	**
10 勉強は好きな方だと思う	1.20	0.81	1.06	1.40	1.41	1.41	**
11 他にすることがないので勉強しようと思う	0.97	0.81	0.91	1.12	0.97	1.07	
12 勉強していないと遊んでいるような気がする	0.93	0.86	0.85	0.99	1.10	1.31	*

* : P < 0.05 ** : P < 0.01

表2. 仕事関連カテゴリーの年齢別平均値

質問項目	平均値	S D	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	有意差
1 看護研究の時に困ったときがある	2.75	0.58	2.72	2.78	2.75	3.00	
2 臨床指導者は専門的な知識が必要と思う	2.75	0.50	2.72	2.75	2.80	2.94	
3 自分の仕事に誇りを感じる	2.23	0.74	2.12	2.38	2.40	2.43	*
4 患者の対応に戸惑うことがある	2.23	0.70	2.32	2.13	2.09	2.00	*
5 専門知識が不足している	2.11	0.75	2.12	2.13	2.11	1.94	
6 臨床指導者は大学での教育が必要だと思う	2.00	0.89	1.85	2.14	2.21	2.70	**
7 学生指導に苦勞している	1.92	0.92	1.77	2.18	2.10	1.87	**
8 もっと人に認められる仕事がしたい	1.71	0.98	1.69	1.81	1.62	1.80	
9 社会福祉の勉強がしたい	1.67	0.95	1.68	1.60	1.78	1.62	
10 スタッフの指導をしている	1.66	1.13	1.18	2.35	2.27	2.25	**
11 スタッフの指導に苦勞している	1.59	1.01	1.26	2.08	1.94	2.00	**
12 スタッフを指導する上での大学教育の必要性を感じる	1.53	0.98	1.32	1.78	1.78	2.33	**
13 自分の仕事には自信がない	1.50	0.84	1.50	1.43	1.54	1.75	
14 学生指導をしている	1.40	1.19	1.10	1.96	1.67	1.57	**
15 看護教育に携わりたい	0.98	0.80	0.93	1.14	1.01	0.82	

* : P < 0.05 ** : P < 0.01

表3. 大学志向カテゴリーの年齢別平均値

質問項目	平均値	S D	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	有意差
1 大卒の方が給料がよいと思う	2.30	0.88	2.30	2.16	2.42	2.60	
2 これからの看護教育は大学であるべきと思う	2.29	0.80	2.18	2.38	2.50	2.76	**
3 看護教員は大学での教育が必要と思う	2.27	0.82	2.06	2.50	2.56	2.94	**
4 看護学校での教育が学歴にならないのは不公平だと思う	2.14	0.92	2.03	2.22	2.24	2.82	**
5 看護学校の教育は知識の詰め込みである	2.13	0.66	2.12	2.02	2.35	2.17	*
6 大学生生活も味わってみたい	2.03	1.01	2.16	1.95	1.75	1.46	**
7 大学に行きたいと思ったことがある	1.97	1.07	2.01	1.77	1.77	1.81	
8 大学に進学している人を羨ましいと思ったことがある	1.96	1.02	1.99	1.97	1.78	2.06	
9 将来的に大学卒業資格がほしいと思う	1.82	1.01	1.65	1.99	2.12	2.33	**
10 大学で専門的な学問を学びたいと思う	1.76	1.02	1.75	1.89	1.74	1.18	
11 機会があれば、大学に行きたいと思う	1.75	1.06	1.76	1.85	1.69	1.13	
12 仕事上で大卒の方が有利だと思う	1.64	1.06	1.60	1.60	1.72	2.06	
13 学歴コンプレックスはあると思う	1.38	1.01	1.28	1.54	1.62	1.17	*
14 看護系大学で社会人入学制度があれば受験したいと思う	1.22	1.06	1.14	1.52	1.21	0.66	**
15 大卒の人に対して引け目を感じたことがある	1.00	0.96	0.88	1.13	1.20	1.40	**
16 大卒の人の方が優れていると思う	0.99	0.85	0.98	0.91	1.03	1.35	
17 働きながら大学に行きたいと思う	0.92	0.96	0.80	1.21	1.03	0.50	**
18 自分には学士を取得できる力があると思う	0.78	0.83	0.80	0.84	0.61	0.62	
19 仕事をやめて大学に行きたいと思う	0.74	0.84	0.78	0.86	0.47	0.31	**
20 もし学士が取れたら、大学院への進学も考えている	0.69	0.90	0.70	0.81	0.52	0.46	

* : $P < 0.05$ ** : $P < 0.01$

IV 考察

看護教員と看護婦を対象に同様の調査をした舟島ら(1997)の研究では、「学士取得のニーズあり」は44.3%と約半数の者が学士取得ニーズをもっており、このうち看護婦では38.5%が学士取得のニーズがあったと報告している(舟島, 1997)。本研究では「学士取得意志あり」は19.2%であったが、「条件があえば可能」を加えると43.5%であった。「意志がある」という回答と「ニーズがある」とする回答は、回答者にとって若干ニュアンスが異なるのではないかと考える。つまり、「ニーズがある」とす

る場合には、行動化するかしないかは関係なく、自分にとって必要性があることを意味する。一方「意志がある」と回答する場合には、具体的に行動に移す意志があることを意味し、より現実的な行動を予測する積極的ニーズと考えた。我々は潜在的なニーズを探る意味で「条件があえば可能か」という質問を加えた。今回は、積極的ニーズと潜在的ニーズを加えて、学士取得ニーズと考えた。岡山市内の病院で働く看護職の学士取得ニーズが、43.5%であったという結果は、舟島らの報告と同様に高いと考えてよいと判断した。

また対象者背景と「学士取得意志あり」との関連

表4. 条件カテゴリーの年齢別平均値

質問項目	平均値	S D	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	有意差
1 長期の休みが取れないと思う	2.54	0.81	2.53	2.62	2.36	2.94	
2 仕事がきつと感じる	2.51	0.68	2.53	2.48	2.53	2.36	
3 大学に関する情報は少ないと思う	2.16	0.74	2.15	2.25	2.07	2.00	
4 時間的なゆとりがない	2.05	0.98	2.07	2.10	1.98	1.69	
5 仕事と家庭で精一杯である	1.89	1.01	1.76	1.92	2.28	2.57	**
6 大学での勉強にはついていけないと思う	1.76	0.94	1.71	1.77	1.84	2.07	
7 学業を最後まで続ける自信がない	1.62	0.96	1.51	1.79	1.82	1.50	*
8 大学に行くには職場の理解が得られないと思う	1.59	1.05	1.43	1.82	1.79	1.93	**
9 経済的な余裕がない	1.56	1.06	1.56	1.59	1.63	0.93	
10 学士を取得するには年齢的に無理と思う	1.48	1.11	1.16	1.66	2.14	2.83	**
11 体力に自信がない	1.47	1.04	1.40	1.55	1.51	2.00	
12 職場の人間関係で悩んでいる	1.33	0.97	1.26	1.59	1.24	1.25	*
13 大学に行くにはまわりへの遠慮がある	1.28	1.04	1.13	1.53	1.48	1.39	**
14 家庭の理解が得られないと思う	1.09	0.97	0.94	1.13	1.65	1.16	**

* : P < 0.05 ** : P < 0.01

では看護婦（士）より助産婦が有意に高く、また専門学校卒業より短大卒の意志が高いことが明らかになった。短大卒では准学士ということもあり単位取得において条件的に有利であることも要因の一つと考える。なお、助産婦の学士取得ニーズは62.5%と高い値を示したが、対象者数が16名と少ないことを考慮する必要がある。しかし舟島ら（1997）の研究においても助産婦は43.8%（n=112名）と高い学士取得ニーズを示していることから、職種による学士取得ニーズの差がある可能性は示唆される。

年齢との関連では、取得意志は30歳代が最も高いことが明らかになり、受講動機との関連でも学士取得ニーズは30歳代以降に高くなる傾向が示された。そのため、今後同様の調査を行うときには、対象となった看護職の年齢構成をふまえて考察する必要があることが示唆された。

カテゴリー毎に分析すると、自己成長欲求では、「自分の視野を広げたい」「看護以外の人と関わってみたい」が高い値を示した。一般に看護職は学習ニーズは高い集団であるといわれているが、本研究

では単なる知識の習得というよりも、視野の拡大や一般教養を高めたい、人間関係の幅を広げたいなど人間的な成長を望んでいることが明らかになった。20歳代は仕事を覚えるのが精一杯の状況であるが、30歳代以降は仕事には慣れてきたものの、3交代勤務のなかで、井の中の蛙状態だと感じたり、このままでいいのかというあせりがでてきて、視野を広げたいとかもっと他の世界が知りたいという思いにつながるのではないかと考える。

仕事関連のニーズでは、全体的に看護研究や知識不足で困っている状況が伺えた。30歳代以降では、学生指導やスタッフの指導の機会が増え、自分自身の知識や力のなさなどの、指導に関連した苦勞や悩みを持ち、指導の難しさに直面している。一般的に30歳代は仕事上では、管理的役割を求められる時期でもあることから、キャリア発達との関連で学士取得ニーズが高いことも考えられる。また、上述したように30歳代は実習指導や看護研究指導などの役割を果たすために能力不足を感じる機会が多いことも、30歳代が学士取得ニーズの高い原因ではないかと考

える。

さらに、花田ら（1998）も経験年数の多いもの及び主任以上のものが研究の指導を受けることが難しい状況にあることを述べており、指導しなければならない役割があり、スタッフや学生のロールモデルになりたいという意識はあるが、自分自身はその指導を受けることの出来ない環境にあるためにジレンマとなり、大学教育の必要性を感じている実態を報告している。

また「臨床指導者は専門的知識が必要だと思う」「専門知識が不足している」といった思いも高く、これは専門看護師・認定看護師といったキャリアアップ志向が反映している可能性があると考えた。そうした上級看護婦の資格を取るためには、修士課程を修了する必要があるため、その前段階として必然的に学士取得の動機が高まるのではないかと考えた。

大学志向の項目では、年齢が上がるにつれて、「看護教育は大学であるべきだと思う」「看護教員は大学での教育が必要だと思う」との大学教育への期待が大きいと推測する。しかし、一方で現在の看護教育では理論的な教育を重視するために、実践力が身に付かず、現場が困るという意見も多い。つまり、近年の急速な大学化の流れによる大卒看護婦の出現で、現場の看護職が将来のわが国の看護展望について期待や希望を持つと同時に、種々の戸惑いやあせりや不満を感じているのが実態ではないかと考える。

条件項目では、全体的に「長期の休みが取れないと思う」や「大学に関する情報は少ないと思う」などの働きながら学ぶための外的条件の厳しさが伺えた。年齢では、20歳代に有意差がみられ、受講に対して有利な状況が伺えた。年齢が上がるに従い、年齢的や体力的にも無理と感じており、最後まで続ける自信のなさが感じられ、さらに、職場や家庭における役割や責任の重さが伺えた。今回の結果では、学士取得のニーズと職位・婚姻状況・家族状況との関連性は認められなかった。しかし舟島ら（1997）の結果では有意に関連が認められている。また筆者らの先行研究においても家族・職場からのサポートは受講体験の促進因子カテゴリーの1つとなっており、サポートの有無は学士取得のニーズを支援する重要な項目と考える。

以上から、本研究において、岡山市内の病院で勤

務する看護職の学士取得のニーズは全国調査と比較しても同様に高いことが明らかとなった。さらに視野の拡大や人間的な成長を望むといった自己成長欲求、研究あるいは指導上の困難性や専門・認定看護師へのキャリアアップへのニーズなどの仕事関連のニーズ、看護教育の大学化などからの大学志向の要因により今後いっそう学士取得のニーズが高まることが予測される。

しかし自己成長欲求、仕事関連のニーズ、大学志向といったニーズに強く動機付けされても現実には条件が阻害因子となっていることが明らかになった。

大学側の条件は、今年6月の学校教育法の一部改正で、専修学校卒業者への大学編入の門戸が拡大されたことは、多くの看護職の願いに応えるものとして画期的である。しかし、実際に受講に至るには、働きながら学べる職場の条件が同時に整備されることが求められている。職場における条件整備に関して、稲尾は具体的な検討を行い勤務表の配慮や休職制度について報告している（稲尾，1997）。

看護職の学士取得に対する周りの理解不足や病院の経済的理由、看護婦の不足など現代社会の様々な要因からくる職場環境の条件整備は未だ厳しい状況にある。しかし、将来的には、職場が学士取得希望者を理解ある態度で見守れるゆとりのある職場環境、長期の休みを保証する休職制度、奨学金制度など、職場を含めた外部的な条件整備が充実していくことが必要だと考える。同時に大学側の柔軟な体制づくりも急務であろう。学士を取得することは看護の質的向上につながり、ひいては地域住民に対する保健、福祉、医療サービスの充実につながることを期待されるため、看護職の学士取得への道を広げる対応が必要であると考えられる。

V 結論

(1) 岡山市内の病院で働く看護職500名を対象に学士取得ニーズとその関連要因に関する調査を行った。回収率93.8%（469名）であり、そのうち学士取得の意志のあるものは19.2%、条件が合えば可能と回答した24.3%を加えた43.5%が学士取得ニーズを有していることが明らかになった。

(2) 学士取得ニーズを年代別に見ると30歳代が最も高いことがわかった。その理由として、30歳代は管理的役割を取り始める年代であり、看護研究や臨

床実習指導を指導する機会が多い。そうした仕事上で求められる役割を果たすために力不足を感じる機会が多いことから、キャリア発達との関連で学士取得ニーズが高いのではないかと推測された。

(3) 病院で働く看護職は、自分の視野を広げたり一般教養を高めたいといった高い自己成長欲求があり、仕事関連のニーズとしては、看護研究の時や臨床指導者としての専門的知識を得るために学士が必要と感じていることがわかった。また「これからの看護教育は大学であるべきと思う」「看護教員は大学での教育が必要と思う」といった大学教育の必要性を強く感じている実態が明らかになった。同時に、「看護学校での教育が学歴にならないのは不公平だと思う」と専門学校での教育を学歴として認められないことに対する不満を強く感じていることがわかった。

(4) 「仕事を辞めて大学に行きたいと思う」ものは少ないが、働きながら学士を取得するためには、仕事との両立の厳しい現実が明らかになり、内的・外的条件が学士取得行動に大きく影響している実態が明らかになった。そのため学士取得のニーズを支援するためには働きながらも学べる職場環境の改善と専門学校卒の看護職を受け入れる大学側の柔軟な制度の提供が必要不可欠と考える。

以上の結果は、今後の専門学校卒の看護職の大学編入制度の検討のための一資料となると考える。

謝辞

本研究にご協力くださいました岡山市内の各病院の看護部長、所属長、看護職の方々に心から謝意を表します。

引用・参考文献

- 1) 有岡明美、田中智子、和田幸子、安酸史子(1995)、専門学校卒業の看護婦の学士取得に関する体験とその意味. 日本看護研究学会雑誌、18、臨時増刊：243.
- 2) 舟島なをみ、杉森みど里(1997). 専門学校を卒業した看護婦(士)の学位取得に関する研究—学位取得へのニーズの有無に焦点を当てて—. *Quality Nursing*, 3(7) : 57-63.
- 3) Hegge, M.(1995). Restructuring registered nurse curricula. *Nurse Educ.* 20(6): 39-44.
- 4) 花田久美子、大串靖子、木村紀美、阿部テル子、鈴木光子、米内山千賀子、工藤せい子、葛西敦子(1998)、看護職の研究活動の現状についての調査(1)—東北・北海道における研究活動の現状—. 第24回日本看護研究学会学術集会、21(3) : 95.
- 5) 稲尾公子(1997)、看護学の学士号の価値を見出し、看護部として支援する. *Quality Nursing*, 3(7) : 11-16.
- 6) Messmer, P.R., Miller, E. & Spruck, M.(1994). Essential factors for a healthy RN educational mobility program. *Nurse Educ.* 19(3): 28-31.
- 7) MacLean, T.B., Knoll, G.H. & Kinney, C.K.(1985). The evolution of a baccalaureate program for registered nurses. *J. Nurs. Educ.* 24(2): 53-57.
- 8) 大室律子(1998)、「専門学校卒業者の大学編入学」を可能とした制度改革について. 看護教育 39(9) : 755-759.
- 9) 田中智子、和田幸子、有岡明美、安酸史子(1996)、専門学校卒業の看護婦の学士取得に関する体験とその意味(その2). 日本看護研究学会雑誌、19、臨時増刊：220.
- 10) 和田幸子、有岡明美、田中智子、安酸史子(1998)、病院で働く看護職の学士取得に関するニーズ調査. 第11回日本看護研究学会 近畿・北陸・中国・四国地方会学術集会：62.
- 11) 和田幸子、有岡明美、田中智子、安酸史子(1998)、病院で働く看護職の学士取得に関するニーズ調査(その2). 日本看護研究学会雑誌、21(3) : 144.

Needs for Earning BS Degree of RNs Who Work at the Hospitals in Okayama City

FUMIKO YASUKATA, AKEMI ARIOKA*, TOMOKO TANAKA**
and SACHIKO WADA***

Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare Science,

Okayama Prefectural University, 111 Kuboki, Soja-shi, Okayama 719-1197, Japan

**Okayama Central Hospital, 2-18-19, Houkan-cho, Okayama-shi, Okayama, 700-0026, Japan.*

***Seika Nursing Diploma School, 2-13-14, Tomimachi, Okayama-shi, Okayama, 700-0031, Japan.*

****Okayama Kyouritsu Hospital, 8-10, Sakamoto-cho, Okayama-shi, Okayama, 703-8511, Japan.*

Key words: Continuing education, Nurse, Need for earning BS degree, Carrier Development,
RN-BS course